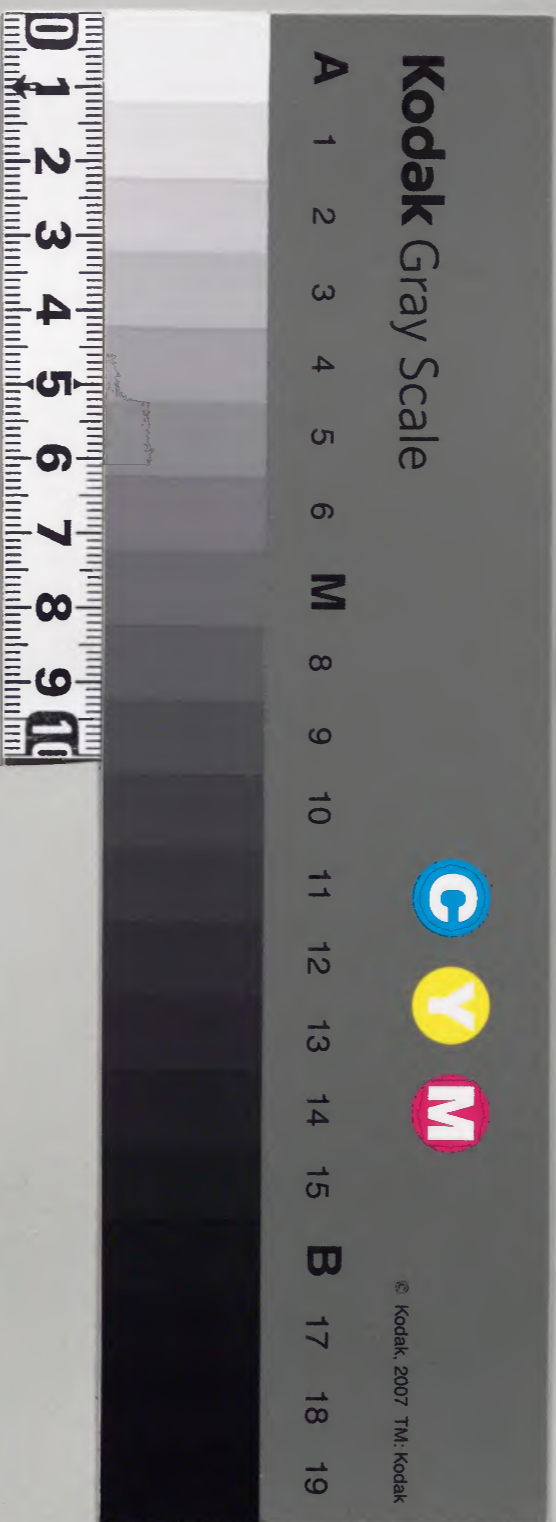


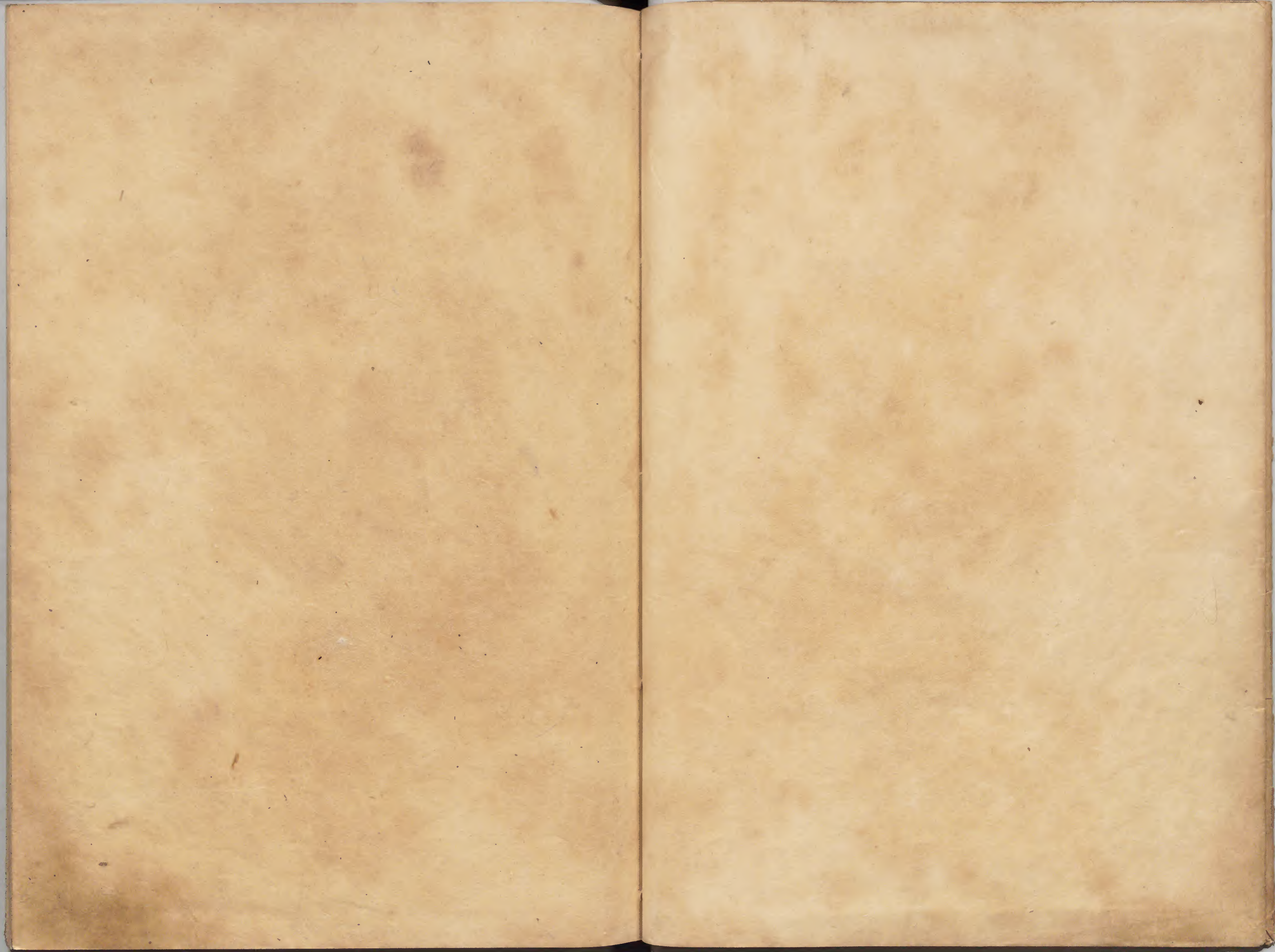
寛永諸家譜

清和源氏已三冊之内
頼季流

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186(35)		
函號	特	76	1







保科

井上

寛永諸家系圖傳

清和源氏

己二

頼季流

保科

信濃源氏井上揚祐助頼季が末系

なりわ

浅草文庫

正則

基正郎

源正忠

筑後守

信州之井部保科少く生所

正俊

基正郎 彈正忠 後わつふゆへ筑おち

とある信州伊奈郡高をりし生所

信玄勝頼二代へつるゆへ教家の名

之十七ヶ度あり是よりして信玄勝頼の

感状教通あり

文禄二年死云八十三歳

正直

基正郎 越前守 後彈正忠と号す

生國月前

信玄勝頼二代へ教度の忠良あり

天正十年

東恒人権現甲州新府へ沙打入の事あり

小田原氏西大軍と引おくる上野より

碓氷とある甲州へ押よせ為陣の時

正臣信別言遠よりあつてを為すものと
心とあつて味方よりあつて言ふ言ふ
酒井氏も討方まぐ所いといつて
中上より言ふも感ありて伊奈半郡
領知も言ふの由未だ承領も
今度被討南方より下る忠信も旨
酒井左衛門尉被討寛心神妙も
至也早建於手あふ伊奈郡半分
可お至事不可を相遠誅へは旨

可被抽軍忠々状如件

天正十年

十月廿四日伊奈郡

保科越前守殿

同年伊奈郡言をの成り乞われ
今より茂次次高頼親同被討其情も
誠部とく人これあつて正臣
此いといつて

大権現の御旗下にけくづりて

中河のつすこいしむも回んりもにわすか
ら枝地へ押寄三日せあ戦く箕輪の城
と業水の家

同十二日七月に別あり

大権現御妹と正並よ下られ

同年九月本居此内書籠の城へ

大権現御手巻の町菅沼小大悟り此の

伊奈親治の侍とゆきしりひ枝城と

元禄一夏よ秀右より枝治の多勢

とよか一帯一かど地形なり
對陣ありとて別れ家とては敵後
よとよぶとて正並よりして軍
をまけよとてかへり

同十三日

大権現信州其回へ御手巻の町正並より

けいせきと其回西房写居城へとて

忠切とてけいせきをいへ家来此の教

うら花と

同年極月三日小笠原右左衛門尉貞孝三
千の甥と引わく正妻が居候を（お）
くすゝの妻は合致と受け酒一の敵
殺多うらうらゆ（貞孝殿軍をこぼく
く乞と進う此時

大控現より御鷹等の御感状をいじり包永
の御腰地と御領と
今後小笠原右左衛門尉全道進進を
表お働くを遂一敵敵地一々

右衛門尉下中右衛門尉
右衛門尉下中右衛門尉
右衛門尉下中右衛門尉

十二月十日御立判

保科源五郎

月十七日軍士山々々洛湯又佛の又枝
本と新しきひは甲州守長ちの御成
御善徳とけしめらる

月十八日小田原に陣を付
月十九日奥州に陣を付
慶長六年六十歳に死す法名
天園透公

正光

肥後守 牛岡村 初は甚高
天正十一年何れ
又於現と稱しをり 後府に取をり

月十二日

大於現秀吉と尾張の小牧にて水軍の
時軍切とせりす

同十八日小田原陣に發向す

月十九日

大於現奥州へ御發向の時伏せし部

まじくゆとむく

又祿元と云ふ舞陣の時名を屋まで
伏奉

同二年後五位下よこげに叙し

享長久二年上校京勝謀叛の時すそ下野の

國小山くにおやままきぐはな一いっつをを判

濱松の沙城さじょうとありける石田三成いしださんせいの退

治の後ご越前えちぜん小の庄しやう御城ごじやうの處ところとつる

國中の事ことと沙汰さたと

同八年森太もりたをを小替こかへまつまつ信列のぶりつ川中

治ちのうら松城まつじやう飯山いひやま長沼ながぬま牧まきの治ち橋はし前

山やま又またヶ下がしたの沙城さじょう沙番さばん二月にがつより十月

まきぐおつとむ

同十

名酒院ないうゑん致ち將軍げんじゆん宣下のんげの時とき付つ身

月十一つきじゅういち年ねん江戸えど御印ごいん丸まる石いし值ぢ水みづ善徳ぜんとくの所ところ

ゆき

月十六つきじゅうろく年ねん御海ごうみ山やま善徳ぜんとくの時とき雨あめ升あがり在ある

尉ゑい々々めくおつとむ

月十九つきじゅうじゅう年ねん大坂おさか御陣ごじんの時とき候まををを奉ほうへ

その後そのご佐竹さたけ義宣よしのぶ復また後ご今いま福ふくのの元もとかへ

恒子つねこよりてめしとて侍

元和げんわ元年大坂事おおい礼れいの時とき琳りん原げんををししる

くみくみ少すく御ご先さきよりよりくくりりるる天あま日ひとと表あは

ゆくゆく会かい我わととししげげ家け来らい此この者ものととああももるる

討う死ち

同二年どうにねん御命ごめいよりよりくく御ご後ごのの王わう

條じょうのの御ご成なりをを左ひだり番ばん一いち部ぶ中ちゆう此この仁にん也なり

お侍おさむらいととしし

同三年

台たい酒しゆ院いん殿でん御ご上かみ洛らくの時とき侍さむらい

同六年大坂御城おおい西にし番ばんととしし

同九年

乃すなは軍ぐん家け々々御ご上かみ洛らくの時とき侍さむらいととしし

大坂御下向おおいのみのみよりより伏ふし身みのの西にし城じやう御ご

西にし城じやう御ご侍さむらいととしし

寛永三年二條御城かんえいへへ行ゆ幸きやう侍さむらいととしし

御氣内ごきないのの侍さむらいととしし

日光山社にっこう御氣ごきの時とき西にし城じやう御ご侍さむらいととしし

介信列伊奈部より我本と知を
急深み久ふ事三ふび又戸橋田
法橋西本の沙門書とつと
月八年七十一歳にて死
道義

正重

親貞

女子

玉田筑前守室

母古

大於現此御妹一より下六人の一版

女子

お部橋津おり書

正貞

喜正郎 淳正志

大於現御前より幼少此時より

行り

享長七年

右酒院殿一所ノ人ナリ

同十年後又位下ノ叙ト

同十九年又改御侍ニ付テ

御命ニ付テ御侍ラモ又御侍ニ付テ

御番トシテ

元和元年又改御侍ノ時伏見御

御前ニ御侍遠江守兄正之丞ニ付テ

小守カモ御先ノ御侍ニ付テ

侍ラシテ又天王寺表ノ先務トシテ

く川一其後天王寺ト八九所

ナリト小笠原共初ノ捕秀政ト一

少ク徳トアリ分首級トシテ

之ケ所誤焼疵一トナリ少部

正ノ子トシテ秀政ト正貞ト

一トシテ又人ノ子孫トシテ

少ク百餘トナリノ叙トナリ

ト討死トナリト陣トナリ

大段

右院殿と度との合あ戦いの法軍ほふぐんなり

河かとらぬまらぬまの時とき正ただ貞ただつ物もの

小こ云い上うす

元和三年

右院殿河上洛の時とき侍へいぶ

寛永七年七月 約命やくめいによります

大御妻おほみづめ頭かぶとつとと

同八年八月より翌年あつね八月まで

大坂御番おほさかごばんとつとと

同十一月河上洛の時とき一ひと遣つか御ご已い後ご

日光湯ひかりゆ社やしろ系けいの河かを御侍ごさむらいとつとと

同十二月四月より翌年あつね四月まで

系けい二條ふたじょう水城みづしろ御番ごばんとつとと

同十四年八月より翌年あつね八月まで

大坂おほさか御番ごばんとつとと

同十七年四月より翌年あつね四月まで

二條ふたじょうの御番ごばんとつとと

女子

小右大和守室

女子

小坂式部少輔室

氏重

小原右守

系湯別日ふれあり

小原左衛門大妻甚子とあり

正英

之水

正之

肥後守

後五位下

寛永九年十二月廿八日 納命

四品下叙

同十一月御参内乃時伏在 納命

よより侍候

月十二年七月信州遠とあり

出羽の個山形〜湖加沼お領す

同二十年七月官言上をわ〜終々

奥州會津の城とままふ川加沼あり

家紋九曜鏡の葉

● 集

井上いの上

和名わな河部かべ氏うぢ 井上いの上氏うぢ 名な 孫まご 源みなもと 頼より 季すゑ 孫まご 流りゅう ちわ

河部かべ大おほ龍りゆう少すく輔すけ 法名ほふな真ま海うみ
清康きよかみ忠ちゆう廣ひろ忠ちゆう卿きやう

東照大権現とうてうだいこんげん 一ひと 所ところ 命いのち 守まも 護ご 神かみ 御み 座ざ 所ところ 御み 座ざ

清秀 きよひで

才右衛門尉 牛國三郎

一、伏見の井上中務

慶長九年九月十日死 法名玉林

重成 しげなり

右兵衛尉 牛國白

初少の町

大修理と係り

寛永二年

右近衛殿

右軍家と係り

同年室別はおわく之の知り

存候一ら力十騎足勢二十人

同之由 仰らるる布衣

重次 しげつぐ

宗三郎

寛永十八年

將軍家と縁と

正友

松平屋敷尉

牛園を以

享和十七年死

法名法吟

正勝

内通助

元和五年

將軍家と縁と

寛永三年病氣より死す
法名日榮

同十八年死

正親

教馬

正就

牛九郎 主計次 牛園を以

天正十七年死

台徳院殿と稱しなくすもの

元和元年三月廿七日、後五位下よごのかげに叙し

白針しろのの御みに任じ

同日、御命みことより、御みの御みに列りせ

同八年、皇別みまが、横領よこりょうを成なりし、五万二千

石いしと好領このりょうと

寛永五年、卒しゆし、五十二歳ごじふにさい、法名ほふな日操にちそう

忠源院と号ごうし

政重まさしげ

清長きよなが少尉せうゑい、筑後守ちくごのり、牛酒うすけ日ひ前まへ

孝長たかなが十三じふさん年とし、少せう下げり

名な、源院殿げんゐんゐんへ、任にんじ

元和元年げんわげん三月しげ

將軍しやうぐん家け、一いつ等とう、任にんじ

寛永四年かんゑいげん、任にんじ、五位下ごいごに叙し、筑後守ちくごのり

任にんじ

同十年どうじゅうねん、大目付おほめづりの役やくと、作しやう付づ、任にんじ

同十七年徳列^{とく}一^{いち}おわく一^{いち}カス^{カス}

存^{ぞん}也^や

同^{どう}別^{べつ}は^はあ^あり^りて^て

あ^あり^りて^ては^はあ^あり^りて^て

長^{ちやう}橋^{きやう}は^はあ^あり^りて^て

耶^や縣^{けん}禁^{きん}制^{せい}等^{とう}の^の事^{こと}を^を裁^{さい}評^{へい}と^と

同^{どう}十九^{じゅう}年^{ねん} 納^{なつ}命^{めい}と^とし^して^て

法^{ほふ}民^{みん}の^の慈^じ恵^ゑの^の事^{こと}と^とし^して^て

同^{どう}二十^{じゅう}年^{ねん} 二月^{にがつ}二十^{にじゅう}日^{にち} 三^{さん}名^{めい}と^と加^かへ^へし^して^て

政^{せい}次^じ

清^{せい}長^{ちやう}尉^{ゑい} 七^{しち}回^{かい}武^ぶ列^{れつ}

元^{げん}和^わ口^{くち}年^{ねん}

将^{しやう}軍^{ぐん}家^かと^とし^して^て

寛^{かん}永^{えい}十^{じゅう}四^し年^{ねん} 肥^い前^{ぜん}河^か原^{げん}と^とし^して^て

蟻^{あき}起^きと^とし^して^て 聖^{せい}の^の義^ぎ政^{せい}を^を上^{じやう}侍^しと^と

後^ご向^{きやう}の^の時^{とき}政^{せい}次^じと^とし^して^て 一^{いち}檢^{けん}つ^つり^りて^て

政^{せい}清^{せい}

内記 生玉目か

寛永十九年

將軍家と縁 多々あり

政實

水十郎 生國目か

寛永十九年

竹子代志 一つ目か

政則

源流 生玉目か

寛永十九年

竹子代志 生玉目か

集

源八郎 生玉目か

正利

大学物 河内与 生國目か

名和之

名 徳院殿

將軍家と稱しはくも河原

同九月八月六日辰五位下は叙し河内
守し仁と

寛永五年 修よりく家督と

はくも又がき海と領と

正義

常力 生國同前

寛永五年

名 徳院殿

將軍家と稱しはくも河原野別西方此名

よおわく

名 徳院殿より五ふえの地と称領と

女子

松平伊豆守信綱が妻

女子

本多伊豆守忠利が妻

女子

久世三郎廣常ひろつねノ書

女子

久こ久く日ひ向むか守まも安やす長ながノ書

女子

水みづ於の監けん物ぶつ忠ちゆう長ながノ書

女子

酒さけ井い山さん派はい守しゆう重ちゆう澄じやうノ書

女子

稻いな垣がき平へい三さん郎らう為ため門かどノ書

正仁ただひと

大學だいがく助すけ 七しち回かい月げつか

寛永十六年

將軍しやうぐん家けとねと

菓 こが

之 こが
物 もの

午 う
四 し
日 にち
所 ところ

家 この
紋 ゑ
井 い
樹 じゆ

賴義

伊豫守

鎮守府將軍

賴隆

河内守

鎮守府將軍

升上

頼季 らいき

し葉之郎 しよく

俊五郎下 しよくごろうげ

油實 あぶらみ

升上之郎太郎 のぼりあがり

光平 あきひら

時田太郎 ときでん

光長 あきなが

桑刺二郎 くわさざり

清長 きよなが

同五郎 どうごろう

忠長 あきら

矢升守太郎 やのぼりもり

源長 げん

升上八郎 のぼりあがり

長基 ながもと

小石郎 こいし

長実 ながみ

五郎 ごろう

長政ちかまさ

玉國たまくに

源右げんすけ

九郎太郎くわにらうたろう
けり中経なかつね

清之きよゆき

孫太郎まごたろう

播磨伯人はりまのうぢ

之正ゆきまさ

孫太郎まごたろう

同伯人どうはくじん

之房ゆきむら

孫太郎まごたろう

因防守いんぼうしゅ

高橋たかはし

一いち道伯みちたけ

号なな号なな

天文二十二年てんぶんにじゅうにねん播磨はりま非海ひうみおひく生なま

黒田くろだ官くわん在あ備前びぜん筑前ちくぜん長政ちかまさ志し

あづまあづま軍切ぐんきりととけりけり新征しんせい伐ばつ

の何なにとと死忠しちゆうととぬぬらんらん

慶長五年豊後連見郡立石におわく
黒田如水と大友義流とてふ時
大友の軍将は石原かき束とふあつね
は武勇のなまれありて思ねやして
せは然ふ之房もつゝ然とあるを廣
と討つる所大友が惣軍やふまこと
義流といけども
同六年之房に流し如水とてふ
伏見におわく

大権現と稱し多くは又ちたり
筑前守名代としてはるまふ
石原院敵と稱し之房を殺
功と感しはかゝりてけり
上意とて少く麻毛の良馬とねん
寛永十一年十月廿一日死に八十一歳

庸名

廣路守 七回奉命

十、三歳の時

右、徳院殿と称し、えんどう 通称とあり

長十五、三月廿二日、後、又、位下、ごい 叙

後、海、うみ 守、まも り、に 任、に じ

庸尾

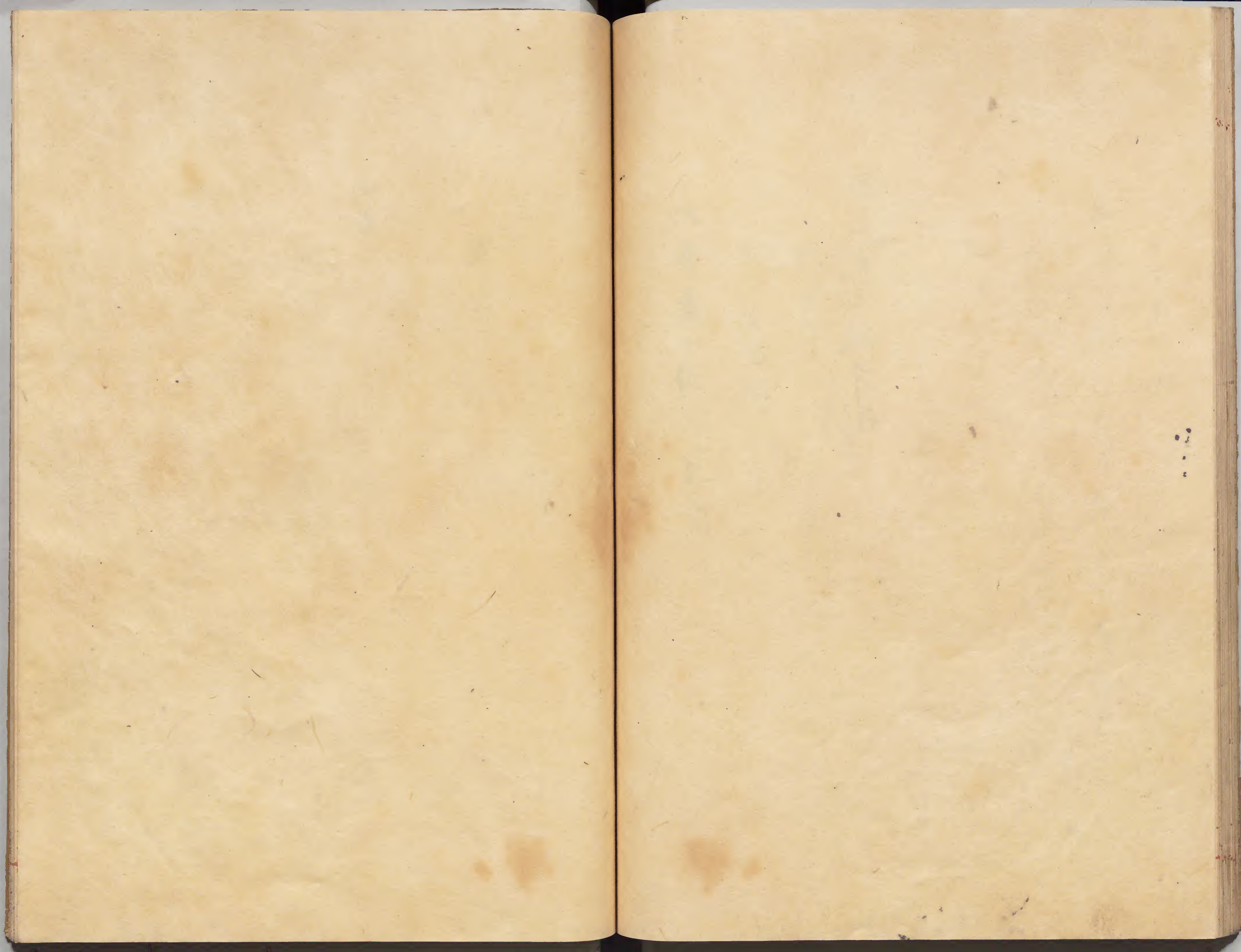
頼母助 たのぼけ 七、なな 國、くに 武、ぶ 州、しゅう 守

母、はは 黒、くろ 田、の 筑、つく 前、まへ 守、まも り、に 女

寛永十七年二月

お軍家と称し、おぐんけ 家

家の、いへ 紋、もん 井、い 樹



井上のりえ

貞安のりやす

修理亮しゆりりやう

上國かみくに信別のぶわか井上のりえ村むら

憲安のりやす

但馬守たにまのり

上國かみくに三河の

遠とほ列り能の川がのの珠たま代しろ初はつ比ひ奈な保たけ仲なかつ守し

憲勝

嗣一其後お別小條氏政一つ又
松田尾張守一つ又
所子六十歳一病死 法名道徳

次郎重隆 一國お別小田原

松田在り助一

文禄三年二月

東照大権現一

信行

名徳後殿御代一

將軍家一

書一

憲行

源右衛門 一國お別小田原

寛永十六年七月

將軍家一

家^{そのま}紋
ニフ^り拍

● 頼信

河内守

鎮守府將軍

升上

此系高宮本とともこ
かたも志んくく正徳が
よ

頼季よりよ

掃部助つたのすけ

従五位下しよごのりげ

井上少将いのうえのすけ

信濃守六部しんねうのむねと領りやう

保實たもつみ

三郎太郎

克平かつへい

克長かつちやう

右丹波守みぎたにはたのりやうと領りやう

又次郎

清長きよなが

忠長ちゆなが

經長つねなが

五郎

太郎

八郎

長基ちやうき

長實ちやうじつ

小太郎

兵九郎

長教ちやうきやう

真圓まゝん

九郎太郎

源八郎

正正しんせい

長冬島

正實しんじつ

長冬島

正貞しんてい

九郎金くわにんかね 長冬島の丹波の領と
康正年中播磨河野の領と
長冬島と領と

正長しんちやう

正直しんじつ

九郎金

九郎金

正行しんぎやう

九郎金

天文三年九月十二日播磨赤松山合戦の
時討死五十一歳 法名紹覚

正信しんしん

九郎金 永正十一年播磨の生

教代攝東饒ぬのぬ部の内と領ど

攝東の城は居して後英資の城は後

何と

天正のうへに織田信長播磨に發向せん

やまのうへとて正信播磨に所々の城

之におろりて援兵と元利輝えとて

輝え後巻とてんと約とて英資の城

要害の地りりてとて城と深くして

と堅くしておのくはくごうに防戦

とて

同亦は秋田城分信忠とて居秀を

同く信長の命に依りて大軍とてわく

播磨に發向して神志加ぬのぬ城と

攻落して信忠系は油津に秀吉と播磨

にうめとて所々の城とせぬとて

一より依り御著の城は小寺坂を築平

和の城とて左助町作城を海上深き

寺法士と同く英資の城は川筋

小寺宿を築治の城を建て秀吉は後と
ふゆへ秀吉は治の城より入る後秀吉の
兵英治の城とせしは城一方はありこれ
よわ附城と二方より入るよと三月に
柵とくくけしは敵もよく攻入る
こいつは城者一秀吉と内通の者あり
く城中にて火のともとあぐるよと城
中の士卒おかくわけきて城まう
おらんとも秀吉の附城とより五月

六可なるて津とくあり山とく
高よこ道んせありやと城者れ
守く城者お強して教所防戦
はわし中とくはけなよ秀吉書と
つげくこ道と強くも強よい

播磨必お古兵英治領あり不可
有お遠のこ城は強の者よ被致下知
津國お傷下被勒御忠意は存知
御朱印一被下る

三月六日

羽後守右衛門

秀吉左判

井上九郎左衛門殿

秀吉守御と申付完栗那之令裁
の時正候裁切ありし由へ秀吉感状と云

所

今度お完栗之方働之候に違下由

跡御の御事候に浅那孫系下

系他州へ候書付申紙下由

此

五月二日

羽後守右衛門

秀吉左判

井上九郎左衛門殿

是下りし由は英豪の威和懐の時之本
左御英豪よりしるは海上と由りて
輝えよ候と

秀吉他州へ後向しる由及く一揆と

ゆし旗とわけし事とちりて下りて

廻文と申し候時よ中村孫平と申し

と此ありし廻文と申し候て秀吉

正俊

正俊は正俊を討略し、その後、
二月十一日、正月八日、病死。七十歳。は
通喜

心郎次郎 外記 永禄四年播州

よき

正純

孝長八年、
同十二月十二日、十三歳、病死。
信名通清

九十郎 外記 生目所

慶長十九年、
名酒院殿、

同年大坂陣の時酒井正徳忠世は
殿して殿向と敵兵ありて時正徳は
急に出陣と一軍より十月廿六日
要害の先普請と作付し其時正徳は
先陣を立ちて鉄砲とてりて敵とあ
ぐりてのし好 約命とてりてゆい翌日
り毎日時正徳はおりしと鉄砲とて
りてより敵つ井は城中へ引きたり
りてその後大筒とてりて城中へはらり

入るものし好 作とけりて敵とあ
後前陣よりり毎日大筒とてりて
大和より大坂再戦の時正徳又忠世
殿して殿向と忠世は御旗印を候する
左橋本の殿向忠世は御右備の先陣
あり五月七日忠世は天守よりおりて敵と
相見守より居る陣の西より敵とあ
りて敵出張して是れとけりて
りて正徳は陣よりすしとて敵の首

二級とらうと成さうら一級ハ甲首らり
但中の馬上のさうらひつりすみ
来るといへども教令を成とさうらひ
味方ゆかくらうとさうら教も又城中
へ引入る後正徳言前より前首
級と但頭よりさけとは但頭が
二道但中の一番首らうらうさうら又
あれと持して中陣におしき
台座院殿も教とさうら後御陣あつ

法士軍功の擢升と相儀
正徳太のいしきと
元年十二月下徳公香取郡の内
又百石の来地とさうら
月十日 仰依く歩卒十人
同十日 納命より大筒の鉄炮
百餘挺撃つてこれと教と
此人筒の筒はさうら
利あつてさうら

いふ所のいふ所の二町ありあはる所
 正徳が製する所の大筒の共
 筒よりして是をけらうといふ所
 ありて是年、もやゆきか利
 ありて百人してさる所の筒に
 十人ゆきりて、さるをけらう
 する其りゆりりす小筒にぎく
 たり鉄炮の筒の筒の製する
 玉の製する二五日なる、八町あり

十町ありて是とすらうま
 幕府の製する所、此製する正徳が
 文とすて、はるこの筒の共
 同十町ありて力立銃鉄炮は
 ありて武州都築郡又相州の内
 又百名の共かほる、はる
 是とす
 同十七年、内命、依り又五十日玉
 百目玉の筒二百挺と製してこれと

又成とせしるゝる平地の戦ふとて
つゆの兵無きとつて一人して敵十人
と名く術と鍛練して是と欲と
是大筒之使のちつたなり
日十八年正月六日 作よりと命
と云々

家紋丹桐 元ハ桐或ハ鷹合とらば



